

国語「書くこと領域」における評価の在り方

～2年生「おもちゃの作り方」を通して～

池田小学校 石田 利永子

1 授業改善の視点

- ・ 児童が自己充実感をもつことができる評価の在り方

2 具体的な実践

本単元では、児童が書くことへの目的意識と必然性をもたせるため、生活科「うごくうごくわたしのおもちゃ」とも関連させて、「1年生のペアの子へプレゼントするぴよんぴよんウサギの作り方を書こう」という言語活動を設定した。そして、児童一人一人に、順序を整理し、簡単な構成を考えて、よりよい文章を書くための力を付けるために、授業の終末に、自己評価（自分チェック）と相互評価（仲間チェック）の2段階の評価方法を取り入れた。

（1）自分チェック

①自分が書いた文章を声に出して読む

自分チェックでは、まず、自分が書いた文章を声に出して読むことを大切にしたい。これは、主語・述語の関係や文と文とのつながり、「は」「を」「へ」などの正しい表記ができていないかを、自分の目だけでなく声に出すことで、一文一文確かめながら間違いに気づき、直す力を付けるためである。



[自分の書いた文章を指さしながら読む児童]



[書いた文章を声に出して一斉に読む児童]

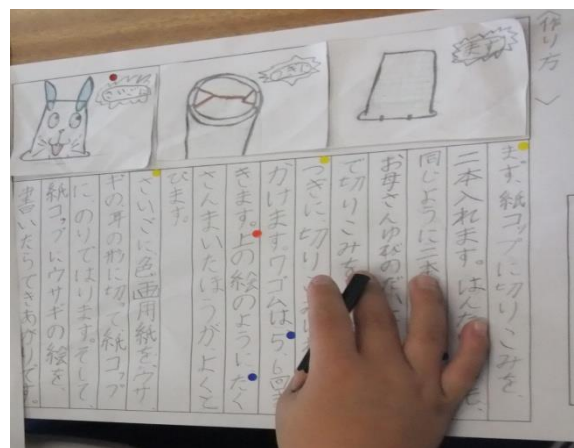
②シールを貼る

1年生の子が、2年生の児童の書いた文章を読んで実際に自分でおもちゃを作ることができるために、本時学習した説明書のこつを取り入れて書けているかをワークシートにそれぞれ色分けしてシールを貼る活動を取り入れた。

本時でのこつは、以下の3点である。

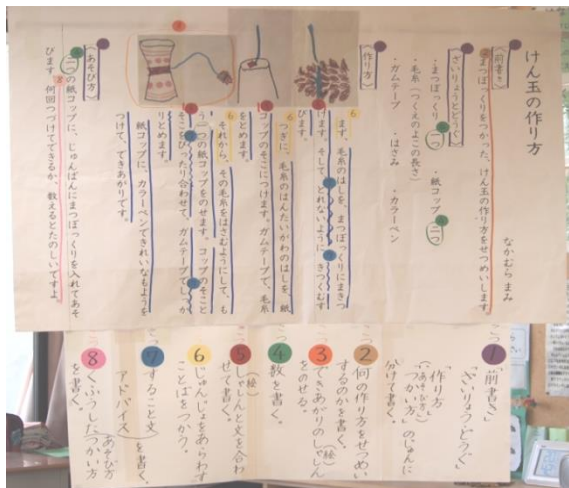
- ・ こつ⑤…絵と文を対応させて書く
- ・ こつ⑥…順序を表す言葉を使って書く
- ・ こつ⑦…作業を説明する文と、作り方のアドバイスの文を書く

この3つを、自分が書いた文章のどこに取り入れて書けているかを、確認させた。



[自分チェックをしたワークシート]

だが、自分が書いたどの文章が、説明書のこつ何番に当たるのかが分かりにくい児童のために、前時までに学習した「けん玉の作り方」の文章を掲示して、どの文章がこつ何番で、何色のシールを貼ればよいのかを自分でチェックしやすいようにした。

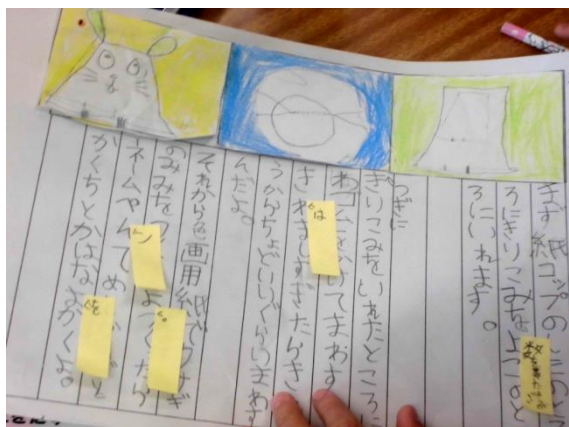


[自分チェックの仕方の掲示]

(2) 仲間チェック

仲間チェックでは、自分では気付かなかった表記の間違いに対して、仲間から付箋を使って教え合う活動を取り入れた。

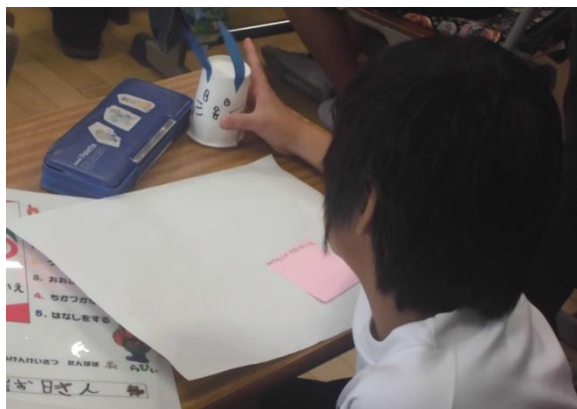
また、仲間から自分の書いた文章のよさを付箋に書いてもらうことで、達成感や自己充実感を味わうこともできた。



[表記の間違いをアドバイスするワークシート]



[互いの文を読み、仲間チェックをする児童]



[仲間からの感想を読む児童]

3 実践を振り返って考えられること

- (1) 書くことへの目的意識と必然性をもたせた言語活動を設定したことにより、授業の終末に自分チェックをする活動をする際には、「1年生の子が読んでも作り方が分かりやすい文章を書きたい」、「自分の文章をよりよいものにしたい」と児童の意欲を最後まで持続することができ、書く力を高めることに繋がった。
- (2) シールを貼ることにより、視覚的にも自分の書いた文章がこつを取り入れて工夫して書いているかがよく分かった。書く力を確実に付けることができたことを、児童も教師も実感できた。
- (3) 仲間から自分の書いた文章のよさを認めてもらうことで、一人一人に自己充実感をもたせることができた。